

都市を解説する

——長野祇園祭から長野びんずるまで (1)——

阿久津 昌 三

1 都市と祭り

中村孚美は「都市と祭り—川越祭りをめぐって—」(1972年)と「秩父祭り—都市の祭りの社会人類学—」(1972年)という論文によって社会人類学的な観点から都市を解説しようとした[中村 1972a, 1972b]。川越祭りの調査では、(1)山車をだす社会的な単位、(2)祭りの運営、(3)山車の曳き廻しの方法、(4)祭りの経費などを対象として祭りの概要をとらえるとともに、山車の組み立てから曳き廻しを経て解体までの過程を通して祭りの実態を分析している。このような実態調査をもとに、川越祭りを支えているものは何なのか、また、市民にとって祭りとは何を意味するのか、さらに、都市の祭りの特質とは何かを探求している。特に、中村孚美は、「都市の祭りの特質は、それがあそびないしゲームとしての性格を強くもつこと—もちろん、宗教儀礼的側面がまったく欠けているわけではないが—」[中村 1972a: 382]と述べている。また、秩父祭りの調査では、基本的な枠組みは、祭りの準備、祭りまで、祭りの日、屋台の解体と収納など川越祭りの調査と同じであるが、精密な観察と聞き取りによって祭りのプロセスをより詳細に分析している[中村 1972b]。

米山俊直は、この秩父祭りの調査について、次のように述べている。

「その論文は、埼玉県秩父地方の総社秩父神社の例大祭について、くわしく調査し、分析を加えたものであった。……これまでの祭りの研究といえば、その由来や古い形式の伝承に力点をかけがちであった。中村さんの研究は、この従来をこえて、祭りの過程を軸に、それを支える人々の文化、社会のシステムを追求した、都市という、複雑な構成をもち、多様な要素をふくむコンプレックスを、人類学の立場から本格的に解明してゆこうとするときに、この中村さんの『秩父調査』は、ひとつのモデルになる。つまり祭りをひとつの切り口にして、都市の複合体に接近するという、たいへん有力な手法になるのではないか。」[米山 1974: 13]

米山俊直は、秩父調査を踏襲して、『祇園祭—都市人類学ことはじめ—』(1974年)と『天神祭—大阪の祭礼—』(1979年)、『都市と祭りの人類学』(1986年)に代表される都市の祭りに関する実態調査を行ない、都市の祭りに関する民族誌を^{モノグラフ}集大成している。さらに、米山は、生活史(ライフヒストリー)という手法をとりいれて、米山俊直・橋本敏子『生活学のプラクティス—生活史による『新大阪』の研究—』に代表される新しい都市論を展開している[米山 1974, 1979, 1986; 米山・橋本 1990]。この系譜には、和崎春日が『民族学研究』(1976年)に発表した「都市の祭礼の社会人類学」を出発点とする、左大文字という都市祭

礼に関する実態調査にもとづいた『左大文字の都市人類学』（1987年）がある〔和崎 1976, 1987〕。

米山俊直は、1973年に担当講座の「文化人類学実習」で祇園祭をとりあげ、京都市内の山鉾町と呼ばれる地域を中心に調査した。これらの調査資料をもとに1974年に『祇園祭』をまとめている。天神祭は1976年に大阪商工会議所の委託を受けておこなわれたもので、1979年に『天神祭』としてまとめられている。祇園祭と天神祭における祭礼を支えるものとの比較してみると、祇園祭はそれぞれの山鉾町を単位とする町組の人々であるのに対して、天神祭は同業者団体を主とする講社組織である。米山は「京都のそれが地縁中心の組織なのに対して、大阪が社縁中心なのは興味ぶかい社会学的相違点である」と述べている〔米山 1986：178〕。ここでは都市の祭りにおける「地縁」と「社縁」という主題がとりあげられている。その後、1980年から1984年まで、米山は松平誠らとの共同調査で神戸まつりを対象としている。米山は、京阪神の調査とアフリカの調査を踏まえて、「都市化の時代」（『同時代の人類学』）のなかで「都市人類学の研究分野」の見取図をしめしている〔米山 1981〕。

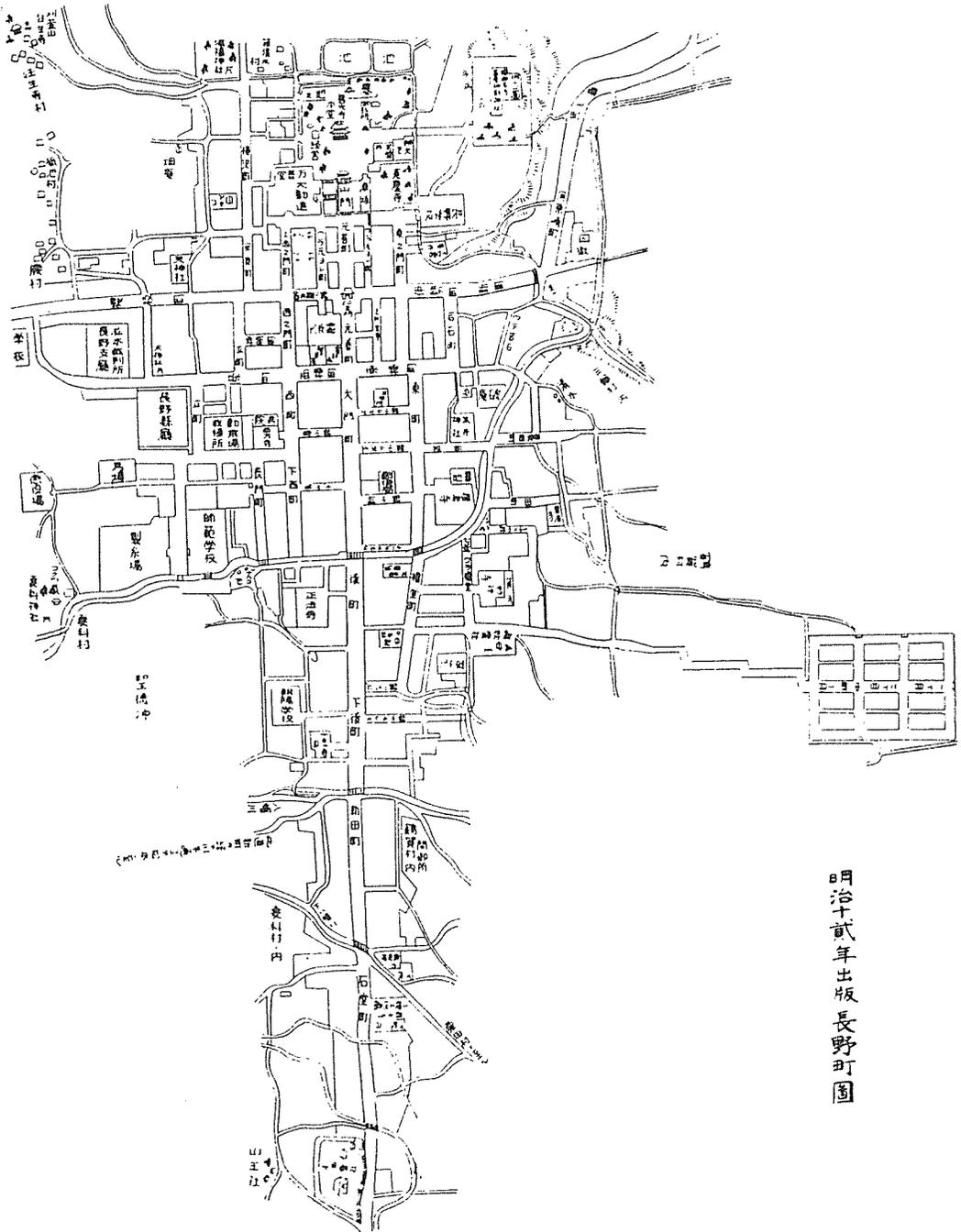
松平誠は『祭の社会学』（1980年）、『祭の文化—都市がつくる生活文化のかたち—』（1983年）などに代表される作品のなかで社会学的な観点から都市を解説しようとした。松平は、オーソドックスな社会学の手法をもとに、祭りを媒介とした都市の地域集団をとりあげている。また、松平は都市の地域集団⁽¹⁾をとりあげるための理論的な立脚点を次のように説明している。

「日本の伝統的都市には伝統的な社会集団——「町内」^{まうち}が存在していること、つぎに、そこに住民特有の生活意識や行動があること、そしてその集団の内部では、文化葛藤とでもいふべき新旧思想・価値観・生活様式の葛藤がおこっており、変化が起こっているが、それこそがマチの社会と文化を築いてきたエネルギーの源泉だ、ということである。そして最後に、伝統的な祭こそが、それらを結びつける大きな結び目になっている——ということである。……（町内という）多機能的、地域網羅的な集団が、それを成立させた社会の成層・集団体系がかわっても、なお残存しているのはなぜかがそこで、問われねばならない。そして、伝統的な都市の町内の祭りこそ、それを集中して投影するもっとも明確な証しなのだ。」〔松平 1980：25, 202-203〕

小林忠雄は、「金沢民俗をさぐる会」の中心メンバーのひとりとして、都市の民俗論を展開しているが、この研究会は次のような項目を課題としてとりあげている（この機関誌の標題は『都市と民俗研究』〔創刊号1977年〕と題するものである。また、小林忠雄は『都市民俗学・都市のFolk Society』（1990年）、『色彩のフォークロア』（1993年）として展開している）〔金沢民俗をさぐる会編 1984〕。

- (1) 民俗学において都市とは何かという概念規定を明瞭にすること。
- (2) 都市を通じて民俗学はどのような社会問題および未来社会への展望に答えられるのかといった点に言及すること。
- (3) 隣接諸科学（都市人類学・都市社会学・都市史学・都市地理学・都市心理学・都市経済学等）との提携によって民俗学が担うべき役割分担の内容を明確にすること。

(4) 東京・大阪・名古屋・福岡といった大都会とは別に、地方の伝統都市が秘めている都
市民俗の性格を明らかにし、特に微視的な地域社会構造の変容過程を確認すること。
これらの視点には、当時、ひとつの流行となっていた都市の建築論、都市の記号論などを



第1図 明治12年の長野町図

とりいれているところに特徴がある。これは、「隠喩としての都市」(『現代思想』, 1983年), 前田愛編「テキストとしての都市」(『別冊国文学』, 1984年)と共通するものがある。特に, 前田愛が都市空間を文学を通して解読しようとする着想は金沢の事例研究にいかされている。この意味で, 金沢という都市を解読する方法は, 都市民俗学と都市の記号論(都市の建築論)とを組み合わせたものである。

都市と祭りに関する実態調査について, 中村孚美, 米山俊直, 松平誠, 小林忠雄の都市を解読する方法を紹介してきた。本稿は, 長野祇園祭をとりあげ, 明治4年から昭和45年までの御祭礼に関する史料をもとに, 「都市と祭り」との関わりについて記述することが目的である。

2 町内と祇園祭

善光寺町はもともと御門前と八町から組織されていた。御門前は横沢町と立町からなる。八町は, 大門町, 後町〔東後町〕, 横町, 北之門町(後に新町, 伊勢町と改組), 東町(東之門町を含む), 西町(阿弥陀院町〔栄町〕, 西之門町, 天神宮町〔長門町〕), 岩石町, 桜小路〔桜枝町〕(上西之門町を含む)からなる(〔 〕は現在の町名及び通称)。ここでは, 祇園祭の御祭礼町について, 『角川日本地名大辞典 20 長野県』(1992年)をもとに概観してみよう。

①御門前 横沢町は大勲進に直属し, これに対して, 立町は大本願に直属し, 善光寺町年寄の支配から独立していた。横沢町は善光寺関係者と職人など(例えば, 「慶応元年には

戸数262で, 鳶職40人, 大工13人, 香具師9人, 行商33人, 小間物13人がいた)が居住していたという。

② 八町 大門町は善光寺宿の本陣・問屋をはじめ, 約30軒の旅籠屋があり, 旅籠屋営業を独占する特権を有していた。後町の町名は鎌倉期に後庁(移動した国庁)が置かれたことにちなむが, 嘉永6年には, 竈数43, その内訳は大屋20, 表店9, 裏店14があった。北之門町は現在の新町と伊勢町となっているが, 伊勢町の町名は伊勢社があったことにちなみ, 新町庄屋の支

第1表 町内の人口変動

| | 明治31年 | 大正5年 | 昭和62年 |
|------------|-------|-------|-------|
| 横 沢 町 | 1,894 | 2,096 | 708 |
| 立 町 | 884 | 770 | 278 |
| 大 門 町 | 862 | 701 | 233 |
| 後 町〔東後町〕 | 253 | | 55 |
| 横 町 | | | |
| 北之門町〔新 町〕 | 340 | 332 | 301 |
| 〔伊勢町〕 | 236 | 228 | 98 |
| 東 町 | ? | 1,002 | 273 |
| 〔東之門町〕 | 436 | 568 | 213 |
| 西 町 | 924 | 821 | 270 |
| 〔栄 町〕 | 261 | 276 | 111 |
| 〔西之門町〕 | | | |
| 〔長門町〕 | | | |
| 岩 石 町 | 620 | 872 | 365 |
| 桜 小 路〔桜枝町〕 | 1,858 | 2,007 | 811 |

第2表 祇園祭の歴史

| | | |
|--------------|----|--|
| 慶応元年 (1865) | | 中止 (但し、明治2年に屋台の虫干しと称して曳き廻し)。 |
| 明治3年 (1870) | | |
| 明治4年 (1871) | 4月 | 祇園祭復興願の提出。 |
| | 6月 | 祇園祭復活。西方と東方の先番の輪番制の導入 (西方)。 |
| 明治5年 (1872) | | 西後町屋台新調 (東方)。 |
| 明治6年 (1873) | | 問御所、東町の屋台新調。西町南の屋台が組み立てた晩に焼ける (放火の疑い?) (西方)。 |
| 明治7年 (1874) | | 西方と東方の対立。屋台巡行中止。横沢町の笠鉦のみ。 (横沢町は江戸時代には立町とともに「御門前」と称して善光寺町の町方とは区別されていた)。 長野と箱清水が合併して長野町、桜小路は桜枝町、阿弥陀院は柴町、天神宮町は長門町、堂庭は元善町に改名される。 |
| 明治8年 (1875) | | 西方と東方の対立。伊勢町の屋台のみ。幟と戸ごとの提燈のみ。 |
| 明治9年 (1876) | | 権堂、問御所、七瀬の3町が合併して鶴賀村となる。 |
| 明治13年 (1880) | | 腰村、西長野町に改名。 |
| 明治14年 (1881) | | 妻科村、南長野町に改名。 |
| 明治15年 (1882) | | 祇園祭復興。 |
| 明治16年 (1883) | | 西方の先番 (7月13日)、東方の先番 (7月14日) となる。 |
| 明治17年 (1884) | | |
| | | 祇園祭は開催されたが史料は不詳である。 |
| 明治25年 (1892) | | |
| 明治21年 (1888) | | 祭礼町18町。 |
| 明治22年 (1889) | | 長野町、鶴賀町、南長野町、西長野町、茂菅村の4町1村が合併して長野町となる。 |
| 明治24年 (1891) | | 東之門町、伊勢町の61戸、200棟焼失 (5月6日)。 桜枝町、西之門町、元善町、城山の267戸、500余棟焼失 (6月2日)。大本願、仁王門等の焼失。 |
| 明治26年 (1893) | | 祇園祭復興。14台の屋台、俄物の巡行 (抽選制の導入)。信越線全通 (4月)。 |
| 明治27年 (1894) | | 屋台の巡行。12町参加 (抽選)。桜枝町の屋台新調 (完成は翌年)。 |
| 明治28年 (1895) | | 日清戦争凱旋祝賀会を兼ねる。屋台、俄物の巡行。17町参加 (抽選)。 |
| 明治29年 (1896) | | 屋台の巡行 (15町参加)。21町参加 (抽選)。 |
| 明治30年 (1897) | | 市制実施祝賀余興 (4月1日)。23町参加 (番外2町)。 雨天のため7月14日、15日に開催。 |
| 明治31年 (1898) | | 不詳。 |
| 明治32年 (1899) | | 屋台の巡行。12町参加 (抽選)。 |
| 明治33年 (1900) | | 屋台の巡行。16町参加 (花咲町を含む) (抽選)。 |
| 明治34年 (1901) | | 屋台の巡行。11町参加 (抽選)。 |
| 明治35年 (1902) | | 屋台の巡行。10町参加 (抽選)。 「参加町は江戸時代と変わらず。旧善光寺領以外では西後町、権堂、問御所が加わる。」 |
| 明治36年 (1903) | | 屋台の巡行。12町参加 (抽選)。 |
| 明治37年 (1904) | | 日露戦争のため、俄物、屋台曳き廻し自粛。燈籠揃いのみ。 |
| 明治38年 (1905) | | 不詳 (明治37年に準ずる?)。 |
| 明治39年 (1906) | | 不詳。 |
| 明治40年 (1907) | | 屋台ははじめて問御所までくだる。燈籠揃いは鐘鑄川以南の町は客分として先に立つのが習慣であった。 |
| 明治41年 (1908) | | 共進会 (博覧会) のため、屋台は休んで燈籠揃いのみ。 |
| 明治42年 (1909) | | 不景気。景気なおしに開催。14町参加。西町上組、西町下組、桜枝町、岩石町は屋台を出さない。千歳町初参加。本屋台は問御所まで。底抜屋台は千歳町、錦町、石 |

- 堂町，問御所まで廻る。目印は停車場から末広町まで廻る（順路の変更）。
- 明治43年（1910）不景気のため中止の意見があるが，協議の結果，大々的に開催することに決定する（抽選）。
- 明治44年（1911）「長野祇園祭の出物近來に見ざる盛況の模様」。大雨にて湯福川氾濫，長野市空前の出水騒ぎとなる（8月4日）。
- 明治45年（1912）中止（明治天皇の病氣？，崩御7月30日）。
- 大正2年（1913）明治天皇の諒闇で屋台，俄物巡行中止。目印と燈籠のみ。権堂の踊り屋台完成。
- 大正3年（1914）屋台8台，俄物巡行11町参加。燈籠揃い。大門町上組と大門町南組が大門町に合併。燈籠揃いの順序は屋台，俄物のそれとは逆である。
- 大正4年（1915）14町参加。屋台8台（抽選）。
- 大正5年（1916）不詳。
- 大正6年（1917）屋台9台。7月14日，年番町と西後町が寿町（県庁）と仲町を巡る。弥栄神社の太々神楽の再興。
- 大正7年（1918）鐘鑄川を境とする南北の対立。
北部7町の俄物のみ。南部は会所も設けず，燈籠揃いにも不参加。祭礼後，和解。
- 大正8年（1919）元善町の屋台新調。15町参加。
- 大正9年（1920）12町参加。屋台7台，底抜2台。
- 大正10年（1921）11町参加。屋台4台，踊屋台4台，底抜2台。
- 大正11年（1922）中央通り改修工事のため屋台，俄物の巡行中止。
大正12年（1921）山門前に各町連合踊屋台を設ける。
- 大正13年（1924）
- 大正13年（1924）中央通竣工祝賀俄物巡行（12月15日）。8町参加。
- 大正14年（1925）南部の新田町，南石堂町，末広町，南千歳町初参加。
「7月13日には北部の屋台は北部，南部の屋台は南部を巡行，7月14日には南北揃って各町を巡行する」という南部の条件が承認される。
- 大正15年（1926）俄物巡行。長野電鉄開業。
- 昭和2年（1927）大正天皇の諒闇で俄物巡行中止。燈籠揃いのみ。
6月3日の改善委員会及び総会で，古い善光寺町の町々の12町で勤めていた年番を参加22町全部で順ぐりに当てることを決定する。
- 昭和3年（1928）抽選で東町に決定するが，東町と上千歳町が表権堂と相生町の角で衝突。上千歳町は横町の底抜屋台を破壊する。年番の西後町は巡行を中止させる。横町の屋台は御祭礼町全体の費用で新調してかえす。
- 昭和4年（1929）「時間勵行，規則厳守」の申し合わせを行なう。俄物の巡行12町参加，燈籠揃い6町参加。
- 昭和5年（1930）「不景気で寂しい御祭礼」。信濃銀行倒産。
- 昭和6年（1931）屋台，俄物の巡行中止。燈籠揃いのみ。
- 昭和7年（1932）屋台，俄物の巡行中止。燈籠揃いのみ。
「屋台の出ない御祭礼は花嫁のいない結婚式だ」。
- 昭和8年（1933）足揃いの廃止（7月12日）。足揃いと燈籠揃いの執行（7月13日）。
俄物巡行（7月14日）。
- 昭和9年（1934）足揃いと籠揃い（7月13日）。俄物巡行（7月14日）。
野沢温泉の神楽獅子特別参加。
- 昭和10年（1935）屋台巡行の南北の分離。足揃いと灯籠揃い（7月13日）。南北の5町ずつの俄物が別々にその区域を巡行（7月14日）。
南石堂町，南千歳町の町総代が西之門町に断らずに通過して抗議と謝罪。引き揚げは午後3時。
- 昭和11年（1936）北側の初寄合開催（6月5日）。祭礼町総会開催（6月15日）。燈籠揃い順番の抽選。
南側の俄物参加は年番の西後町と北石堂町のみ。2つの町から北側に対して合同巡行を要求する。北側の寄合で協議の結果，南側の要求を拒否する（6月17日，19日）。第2回総会で南北別々の巡行を決定する（6月24日）。俄物に参加する北側の

- 各町の集会で、順番の抽選を行なう（7月3日）。南側の屋台は鐘鑄川以南を北側の屋台は以北を巡行する。
- 昭和12年（1937） 南北合同の巡行。燈籠揃い23町、俄物8町参加。
- 昭和13年（1938） 俄物巡行中止。「戦勝祈願」のため燈籠揃いのみ盛大に行う。31町参加。
- 昭和14年（1939） 俄物巡行中止。燈籠揃いのみ盛大に行う。38町参加。
- 昭和15年（1940） 俄物巡行中止。燈籠揃いのみ盛大に行う。38町参加。
- 昭和16年（1941） 俄物巡行中止。燈籠揃いのみ盛大に行う。
- 昭和17年（1942） 太平洋戦争のため中止。
- 昭和18年（1943） 中止。祭典のみ（7月14日、弥栄神社で各町の代表2名が直会式に参加する）。
- 昭和19年（1944） 中止。祭典のみ。
- 昭和20年（1945） 「御祭礼も祭事もひっそりと」。
- 昭和21年（1946） 「自分で生きていくのがせいっぱい」。
- 昭和22年（1947） 俄物巡行、燈籠揃い中止。
- 昭和23年（1948） 俄物巡行、燈籠揃い中止。
- 昭和24年（1949） 俄物巡行、燈籠揃い中止。
- 昭和25年（1950） 全町総会。燈籠揃い中止。各戸にて献燈を勧誘する（7月13日、14日）。俄物は山門下、昭和通りの2か所に屋台を据え置き、踊り、囃子を行なう。
- 昭和26年（1951） 不詳。
- 昭和27年（1952） 俄物巡行の復活。この年から権堂の大獅子と踊り舞台が先頭に立ち、年番4町の俄物がこれに続くという形がふつうになる。年番以外で俄物を出すのは少なくなる。緑町初参加。
- 昭和28年（1953） 俄物巡行。
- 昭和29年（1954） 俄物巡行。燈籠揃いは客燈籠8町、祭礼町26町。
- 昭和30年（1955） 俄物巡行。
- 昭和31年（1956） 俄物巡行。
- 昭和32年（1957） 緑町が年番町になる。祭礼終了後、年番町と長野商工会議所の提案で、「祇園祭反省研究会」の開催。緑町の屋台購入（鬼無里村から）。
- 昭和33年（1958） 俄物巡行は7月24日の夏祭り行事と一緒に。長野市が屋台を出す費用を補助する。
- 昭和34年（1959） 先乗巡行、俄物巡行。屋台8台（7月24日）。夏祭り前夜祭（広告祭）開催（昭和41年〔1966〕まで続く）。
- 昭和35年（1960） 足揃え、俄物巡行。目印巡行なし。屋台4台参加。
- 昭和36年（1961） 不詳。
- 昭和37年（1962） 俄物巡行。屋台5台参加。権堂と年番町のみ。
- 昭和38年（1963） 俄物巡行。屋台5台参加。権堂と年番町のみ。
- 昭和39年（1964） 俄物巡行。大勧進、大本願物見下で必ず踊るという江戸時代以来の習慣が崩れ去る。
- 昭和40年（1965） 屋台巡行。年番町のみ。屋台陳列庫設置陳情書の提出。
- 昭和41年（1966） 松代群発地震のため中止。
- 昭和42年（1967） 中止。夏祭り前夜祭（火と水と音楽と若物たち）開催（昭和45年〔1970〕まで続く）。
- 昭和43年（1968） 権堂町、緑町の屋台が巡行、大門町、新田町、北石堂町の屋台が据え置かれる（7月14日）。
- 昭和44年（1969） 中止。祭りの改革が議論されるようになる。
- 昭和45年（1970） 善光寺日本志願殿落成協賛（5月1日）。「昭和通りに集合し、中央通りを上がり、元善町大勧進の南を廻り、善光寺まわりを廻って解散。
- 昭和46年（1971） 長野商工会議所主催の「長野びんずる（市民祭）」の夏祭りの誕生。

大正8年～昭和19年

| | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
|-------|---|---|----|----|----|----|----|----|---|---|---|----|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 横 沢 町 | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 立 町 | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| 大 門 町 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | | |
| 西 後 町 | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| 東 後 町 | ○ | ○ | | | | | ○ | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 横 町 | | | | | | | ○ | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 新 町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 伊 勢 町 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| 西 町 | | | | | | | | | 中 | | | 不 | | 中 | | ○ | 不 | | | | | | | | | 中 |
| 西 町 上 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 西 町 南 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 栄 町 | | | | | | | ○ | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ |
| 西之門町 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| 東 町 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ |
| 東之門町 | | | ○ | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岩 石 町 | ○ | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 桜 枝 町 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ |
| 上西之門町 | | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | ○ |
| 元 善 町 | ○ | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | |
| 権 堂 町 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| 西鶴賀町 | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 長 門 町 | | | | | | | | | 止 | | | 詳 | | 止 | | | 詳 | | | | | | | | | 止 |
| 緑 町 | | | | | | | | | | | | *1 | | | | | *2 | | | | | | | | | |
| 問御所町 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ |
| 新 田 町 | | | | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 千 歳 町 | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 上千歳町 | ○ | | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ |
| 南千歳町 | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | |
| 北石堂町 | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | |
| 南石堂町 | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | ○ |

*1 8町の踊屋台参加の記載有り。

*2 南北各5町の俄物参加の記載有り。

昭和20年～昭和45年

| | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 |
|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 横 沢 町 | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 立 町 | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 大 門 町 | | | | | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | ○ | | |
| 西 後 町 | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | |
| 東 後 町 | | | | | | | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 横 町 | | | | | | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 新 町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 伊 勢 町 | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 西 町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | 中 | |
| 西 町 上 | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 西 町 南 | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 栄 町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 西之門町 | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | |
| 東 町 | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | ○ | | | | ○ |
| 東之門町 | | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 岩 石 町 | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 桜 枝 町 | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 上西之門町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 元 善 町 | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | ○ |
| 権 堂 町 | | | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ |
| 西鶴賀町 | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 長 門 町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 緑 町 | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | ○ | | | ○ | ○ |
| 問御所町 | | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | |
| 新 田 町 | | | | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | ○ | |
| 千 歳 町 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 上千歳町 | | | | | ○ | | | ○ | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | ○ |
| 南千歳町 | | | | | ○ | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | ○ | | | | | | |
| 北石堂町 | | | | | ○ | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | ○ | | ○ | | | ○ | | |
| 南石堂町 | | | | | ○ | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | |

配下にあった。ここは北国街道の善光寺境内への入口にあたり繁華街のひとつとなっていた。東町の町名の由来は、善光寺の門前の大門町の東に並行することにちなむという。東町は明治以後問屋町として栄えたが、第2次世界大戦後問屋のほとんどが南部に移転した。西町は阿弥陀院町（栄町）、西之門町、天神宮町（長門町）などからなる。岩石町の町名の由来は虎御前石にちなむという。嘉永6年には竈数58、その内訳は大屋22、表店20、裏店16があった。ここは北国街道の越後口にあたり、魚・海産物店が多かった。桜小路町は現在の桜枝町であるが、嘉永6年には竈数184、その内訳は大屋67、表店43、表借地30、裏店30、裏借地14があった。ここは裾花川の谷口集落で、麻・紙商人が多かった地域で、明治以後も繁華街として栄えたという（第1図「善光寺の町内」、第1表「町内の人口変動」参照）。

ここでは小林計一郎の『長野御祭礼史』（1971年）をもとに祇園祭の歴史を概観してみよう（第2表「祇園祭の歴史」、第3表「祇園祭屋台巡行（踊屋台、底抜、俄物などを含む）」参照）[小林(計) 1971]²⁾。明治4年（1871）4月に長野の祇園祭の復興願が提出され、同年6月に祇園祭は復活された。この時の祭りの主体は江戸期の町内を単位とするものであった。江戸期の祇園祭の巡行は、大門町通りを境として、西方と東方に分かれて行われるという方法がとられていた。つまり、祇園祭は江戸期の町内という「地域的なユニットの集合体」とする近世的な都市空間のもとで行なわれていた。しかし、その復活直後から、屋台、俄物などの巡行の順番をめぐる西方と東方との対立関係が表面化している。西方と東方との対立関係は江戸期の町内の解体過程という明治前期の町内の変動を反映したものであった。つまり、明治前期の祇園祭は、江戸期の町内の解体と明治の市制町村制の公布にともなう町内の再編成の影響を受けた。明治26年に屋台、俄物などの巡行の順番は「抽選」という方式をとることで東西の対立関係を解決している。明治30年には市制実施祝賀会のために屋台が巡行されている。明治31年から明治39年までは西後町、問御所町、権堂町を除けば、祇園祭の参加町は江戸期のものとかわらない。しかし、明治40年に屋台がはじめて鐘鑄川以南の問御所町まで巡行した（問御所町はすでに明治29年、30年に燈籠揃いに参加していた）。これ以後、屋台の巡行などは旧善光寺町の区域を越えて広い範囲の町内で行われるようになった。言い換えれば、祇園祭が江戸期の町内という地域的なユニットの集合体とする近世的なものを越えた新しい都市空間のなかで行なわれたことを意味する。町内の在り方が次第に多様化していったのである。

祇園祭の参加町の変動が見られるのは、中央通り拡幅工事が完成された翌年、大正13年の中央通り竣工祝賀会以後である（すでに大正4年に信越線長野駅開業されている）。大正14年には祇園祭において南北の対立関係がみられる。この南北の対立関係は鐘鑄川を境界とするもので、裾花川からの分水をめぐる問題が表面化したものである。大正天皇の崩御後、昭和2年に旧善光寺町12町で務めていた年番が22町全部で順ぐりに割り当てられることに決定している。その後、昭和12年頃まで、不景気のための屋台巡行の中止と南北の対立関係を繰り返しながら祇園祭は断続的に開催されている。この時期は、町内会の地方的整備が行なわれた大正10年から昭和10年までにあたる。昭和13年頃から昭和26年頃までは祇園祭は燈籠揃いくらいしか実施されていない。昭和27年から昭和45年まで祇園祭の屋台巡行は年番の町だ

けが担当するという状況で、昭和46年に「長野びんずる」として長野市商工会議所主催の祭りとして再編成されることになった。

祇園祭という祭りを支える人々の「祭りの主体」の変化が重要であろう。祇園祭は江戸期の町内という近世的な都市空間において行われていた祭りである。明治初期に祇園祭が復活されて、祭りの主体は善光寺町の御門前と八町を越えて西後町、問御所町、権堂町まで広がりを見せた。これは鐘鑄川を境とする南北の対立関係を生じさせている。また、祭りの主体は、祭りの中断とともに変化する傾向にある。特に、戦後、祭りの主体は、北部の町内は年番町だけが参加するだけで、南部の町内の多くが参加するという形式となった。つまり、祇園祭という祭りの主体は、江戸期の町内をはじめとする旦那衆からなる西後町、問御所町から、権堂町という花街を経て、緑町、千歳町、石堂町と変化していった。と同時に、昭和41年に長野市が篠ノ井をはじめとする一市三町三村を合併したことで、松代群発地震の発生とによって、祇園祭は門前町界隈の祭礼としての意味を失ったといえることができる。

昭和32年に「祇園祭反省研究会」という組織が創設されるとともに、昭和34年に青年商工会議所主催の夏祭り前夜祭（広告祭）が開催され松代群発地震が起きる昭和41年まで続けられた。この祭りは昭和42年に夏祭り前夜祭（火と水と音楽と若者たち）に受け継がれたが、この新しい祭りは3年連続の梅雨に祟られて中止をやむなくされた。昭和46年に長野商工会議所主催（長野市主催）の「長野びんずる」（市民祭）の夏祭りとして再編成された。祇園祭は長野びんずるとは独立して行われている。

注

- (1) 有賀喜左衛門は、「都市社会学の課題」のなかで、日本都市の構造的特質について次のようにまとめている。

「都市における氏神鎮守の祭祀が町内連合によって組織されているのは、この単位となる町内の生活連帯に根拠がある。その町内が同族団と組との混合形態より成立することもあるのは、家の関係に上下関係や平等関係を複雑に持つからであり、町内が同族団または小組を包括して存在するのは後者の機能をもってしては処理し得ない生活上の要求を担当するからであり、さらに町内連合がその上に存在することも町内では担当できない事柄を担当するからである。」（『有賀喜左衛門著作集Ⅶ』、未来社）

- (2) 祇園祭の歴史に関しては、「弥栄神社の御祭礼」（『善光寺門前町百年の歩み 長野市元善町誌』）のなかにも記載されている [元善町誌編集委員会編 1980：140-150]。

追記

本稿は、1993年6月19日に、第16回「都市を考える懇談会」（於・国学院大学）において研究発表したものにもとづくものである。

参 考 文 献

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1992 『角川日本地名大辞典 20 長野県』東京：角川書店。
 金沢民俗をさぐる会編 1984 『都市の民俗・金沢』東京：国書刊行会。

- 小林計一郎 1971 『長野御祭礼史』長野：長野御祭礼研究会。
- 小林忠雄 1990 『都市民俗学・都市のFolk Society』東京：名著出版。
1993 『色彩のフォークロア』東京：雄山閣。
- 松平 誠 1980 『祭の社会学』東京：講談社。
1983 『祭の文化—都市がつくる生活文化のかたち—』東京：有斐閣。
- 元善町誌編集委員会編 1980 『善光寺門前町百年の歩み 長野市元善町誌』長野：長野市元善町。
- 中村孚美 1972a 「都市と祭り—川越祭をめぐる—」古野清人教授古稀記念会編『現代諸民族の宗教と文化』東京：社会思想社, pp. 353~384。
1972b 「秩父祭り—都市の祭りの社会人類学—」『季刊人類学』3(2):149-29.
- 米山俊直 1974 『祇園祭』東京：中央公論社。
1979 『天神祭』東京：中央公論社。
1981 『同時代の人類学』東京：日本放送出版協会。
1986 『都市と祭りの人類学』東京：講談社。
- 米山俊直・橋本敏子 1990 『生活学のプラクシス—生活史による「新大阪」の研究—』東京：ドメス出版。
- 和崎春日 1976 「都市の祭礼の社会人類学」『民族学研究』41(1):1~29。
1987 『左大文字の都市人類学』東京：弘文堂。

(1993年8月31日 受理)